
緋弾のアリア ~黒き疾風~

Aberu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア～黒き疾風～

【NZマーク】

N1022Y

【作者名】

Aberu

【あらすじ】

空から女の子が降ってくると思つか?

とある事情で1年のとき東京武蔵高に転校してきた、杉崎 誠はその日神崎・H・アリアと出合つ。そこから彼の非日常が始まる。

プロローグ 運命の出会い

窓から女の子が降ってくると思つか？

少なくとも俺、すぎなき 杉崎まいさき 誠はまこと そうは思わない。

そんのは普通じゃない異常事態に決まつていて、だから空から女の子なんか打つてこなくていい、武健ぶけん である俺はそれを見過こしすことなどできないから。

ある日突然それは起つた。

「この自転車には爆弾が仕掛けあります」

機械的な声がスピーカーから聞こえてくる。
なんだよこれ。朝からろくなことがないな。

夜遅くまでゲームして寝坊した俺は自転車を全力でこぎながら内心毒づく。

はじめはいたずらか？とおもつたがサドルの下から聞こえてくるピッピッピという音で事実と実感した。

こんな普通の自転車に取り付ける爆弾だ、そこまで大きくはないだろう。

だいたい子の次に来る言葉は予想できた。

「自転車を降りやがつたり、減速すると爆発しやがります」

再びスピーカーから機械的な声が聞こえる。

予想通りだ。この手のパターンのジャックならおなじみの台詞だ。

「携帯を使用した場合も 爆発しやがります」

再び聞こえる機械的な声。

んーこれじゃあ助けを求めるのは無理そうだな。

こんなときでも俺は冷静だつた。俺も武偵の端くれこんなことで平常心をなくしてたら武偵の恥つてもんだ。

このシユチュエーション、まさか例のチャリジャックか？
ニュースでは模倣犯はつかまつたと聞いてたんだがな。

まあどでもいいっちゃどーでもいいか。

とりあえずこの死亡フラグを回避しねえとな。

登校途中に爆死なんていやだからな。

助かる方法を考えた拳句、頭に浮かんだのは・・・自爆。
これしかないだろ。

後ろでは一輪が銃を向けて待機している、それにこちらも自転車をこいでいるので解除はできなさそうだしな。

俺はどうするかって？

もちろん自爆する前に逃げるさ。

下手すりや死ぬかもしないが何とかなるだろ。

つーかまず俺が『死ぬなんてありえない』がな。

お、ちょうどいいところに川があるじゃねえか。俺は覚悟を決めて作戦を開始する。

制服のポケットから携帯用のワイヤーを取り出し、近くにあつた木に向かつて発射。

もちろん自転車は全力でこいでいる。

さらに後ろから撃たれるよりも早く振り向きざまに愛銃である「ザートイーグルを取り出し発砲。

二輪につんであつた短機関銃サブマシンガンおそらくはH&Hであったそれは粉々に破壊された。

自転車はそのまま川に突つ込み川に落ちたかと思つた瞬間爆発した。

まだあの自転車買つたばかりだったんだがな・・・

俺は内心落ち込みながら校舎へ向けて歩き出した。

幸い校舎は近くにある。すぐつべだらう。

「ハハ、武偵高」と武偵高校はレインボーブリッジの南に浮かぶ南北2キロ・東西500メートルからなる長方形の形をした人口浮島の上にある。
学園島とあだ名されたこの人口浮島は『武偵』を育成する総合教育機関だ。
武偵とは凶悪化する犯罪に対して新設された国際資格で、武偵免許を持つものは武装、逮捕権などを有するなど警察と似た活動ができる。
警察と違つてこれは金で動くことだ。
金さえもあれば武偵法の許す範囲内ならどんな仕事でもこなす便利屋だ。

「なぜこうなった?
俺は今茂みに隠れている。

田の前には友人であるキンジと、見知らぬ女の子がいる。

どうやらもめているようだがこの距離ではあまりよく聞き取れない。少女が顔を赤くしながら口論しているとキンジの背後の茂みが動いた。

キンジはすぐそのことに気づいたようだが、少女は頭にちが上つているのか気づいていない。

「待て！アリア」

キンジは少女 アリアのところへ向かって駆け出す。
かばう氣か？

茂みから出てきたのはさつきの一輪が3機。

このままじゃやばいと思った俺は、ワイヤーを取り出し前方の壁に向かつて発射。

キンジと一輪の間にに入るよう滑り込む。

今度はデザートイーグルではなく、漆黒の炎の装飾が施されたガバメントを抜き、すでに短機関銃サブマシンガンから放たれた銃弾をはじく。その間に左のホルスターから取り出したデザートイーグルで相手の銃を破壊。

俺のガバメントは少し改造がしてあって通常より装弾数が多いので少々撃つたところ弾切れにはならない。

そのまま飛んでくる銃弾をはじきつつデザートイーグルで残りの2機を破壊。

「よつキンジ、朝から災難だつたな」

銃をしまいつつ後ろの体育倉庫に隠れていたキンジに呼びかける。

「ああ、だが今はそれどころじゃない……逃げるぞ誠！」

キンジが校舎の方に向かって全速力で走りだす。

俺もキンジについていったが、途中やつが撒いた銃弾でこけそうになつたぞ。

「待て強猥男！・・・みやおきやー！」

後ろを振り向いて見ると見事にこけたアリアがいた。

「逃げるなこの卑怯ものーでつかい風穴あけてやるんだからーあー！」

それにして、キンジ足速いな付いていくのが大変だぜ。
それにそつきの逃げるときの行動、もしかしてこいつヒステリアモードかー？

などと考えてゐながら武道館に到着、時計を見てみると完全に遅刻だな・・・

プロローグ 運命の出会い（後書き）

もうすぐ入試があるので、更新は不定期ですができる限り書いて行きたいと思っています。応援お願いします。

第2話 突然現れたピンクの悪魔

俺は今新しい2年の教室に向かっている。

ここまで完全に遅刻すると慌てる気も起きないな。
ちなみに俺とキンジのクラスは2・Aだそうだ。

「それにしてもキンジ、何であんな状況に？」

「俺の自転車に爆弾が仕掛けあってな、あの子にそれを助けても
らったんだ……」

「まじか、実は俺の自転車にも爆弾が仕掛けられてたんだ。それに
してもキンジなぜお前ヒステリアモードだつたんだ？」

「うう……それは……」

「まあ話したくないならそれでもいいが

キンジの顔は少し暗い。

やはり女の子の前でヒステリアモードになつたのはショックだつだ
んだろう。

ヒステリアモードというのは正式には『ヒステリア・サヴァン・シ
ンドローム』一定以上の恋愛時脳内物質が分泌されると常人の30
倍以上の量の神経伝達物質を媒介して大脳・小脳・脊髄といった中
枢神経系の活動を劇的に亢進させるといったものらしい。

その結果、論理的思考力、判断力さらには反射神経までもが飛躍的

に向かうといつたスーパー モードになれる。

これだけすごい能力だが、発動条件が性的に興奮することなのでキ
ンジはこのモードになることを嫌つていて。

何でも中学のときこの体質のせいでひどい目にあつたりじこののが、キンジはこのことをあまり語りたがらない。大体想像はつくんだけどな。

「よつ、キンジに誠！お前らも△か！」

声のするほつを見てみると、車輌科の武藤 剛氣が△から△歩いてきた。

「お前相変わらずげんきだな」

俺が言△と武藤はキンジをみて

「△した？キンジ、星伽さんと同じクラスになれなかつたのが悲しいのか？」

「武藤・・・今俺に女の話はするな・・・」

マジで怒つてゐらしく、武藤が一步引いた。

ちなみに星伽とは星伽 白雪のこととキンジの幼馴染でキンジの家に行つてるときに知り合つた。

一言でいうと、大和撫子ってとか。
かなりヤンデレが入つてはいるがな・・・。

「それはそつと誠お前今年は△に入るんだよ」

「今年は探偵科の予定だ、少し頭も鍛えねえとだねだからな」

「やつか・・・でもお前ぐらいだぜ、△△△△と担当科△かえてるの」

「それが俺のやり方なんだよ」

そう俺は強襲科なら強襲科をずっと続けるのではなく、いろいろな科目に参加している。

メインは強襲科なのだが、狙撃科や装備科などといった戦闘に関係する科目は全般に参加しているということだ。

「先生あたしあいつの隣がいい」

今は俺たちがクラス分けされた最初のホームルーム。
なんとさつきのピンクのツインテールの少女 神崎・H・アリ
アが同じ2年A組だったのだ。

「キンジ残念、逃げ切るのは無理そうだぜ」

俺はキンジに小声でつぶやく。 周りはアリアのキンジの隣がいい発言で大盛り上がりだ。
かわいそうにキンジおびえている。
一体あの子になにしたんだ？

「な、なんでなんだよ」

「よくわからんが残念だったなキンジ、あきらめて死ね

「強襲科のやつらみたいない」とこいつなー

「いや、俺基本強襲科なんだが・・・」

「せういやそうだつたな……」

キンジが頭を抱え込む。

んー、少し言い過ぎたかな?

ちなみに強襲科では『死ね』が挨拶代わりに使われている。
普通の高校では考えられないようなことを言いまくるとんでもない
学科である。

1年の時はキンジも強襲科だつたんだがな。

「よ、よかつたなキンジーなんだか知らんがお前にも春が来たみたいだぞ！先生！俺くじ引きでキンジの隣だつたけど転校生さんとかわります！」

武藤がすばやく荷物をまとめ席を替わる。
クラスの黄色い歓声は収まるといいをしらないな。

「キンジ、これ セッキのベルト」

ベ、ベルトつて・・・キンジ本当に一体その子になにしたんだ？？？

「理子わかった！わかつちやつた！　これフラグばつぱきにたつてるみー。」

キンジの隣に座っていた峰理子が勢いよく席を立つ。

「キー君ベルとしてない！　そしてそのベルトをツインテールさんが持ってきた！　これ謎でしょー・謎でしょーでも理子には推理できた！　できちやつた！」

大体アリアと変わらない身長をもつ小柄の子は探偵科でNO、
1のおばかさんだ。

制服もひらひらのフリルだけの服に改造してある。

キー君とは理子がつけたあだ名である。

ちなみに俺はマー君といつあだ名で、俺自身あまりそういう呼び方
をさるのは好きではない。

「キー君は彼女の前でベルトを取るような何らかの行為をした！
そして彼女の部屋にベルトを忘れてきた！ つまり一人は・・・熱
い熱い恋愛の真っ最中なんだよ！」

まあ、朝のあの感じからしてそういう関係ではないとは思つんだが
な。
しかし周りのやつにはやつは思わない。

「キ、キンジがこんなかわいい子といつの間に！？」 「影の薄い
やつだと思つてたのに」
「フケツ」

キンジが頭を抱えて机に突つ伏したとき、

すきゅんすきゅん！

鳴り響いた一発の銃声が教室に響きみんなびたりと止まる。

真っ赤になつたアリアが銃を撃つたのだ。

「れ、恋愛なんてくだらない！」

あーあ壁に穴があいてるぞ。

ちなみにここ武偵高では銃は必要以上に発砲しないというルール

になつてある。

つまり、してもいい。

まあ、自己紹介中に銃をぶつ放したのはアリアが初めてだと思つが・

・

「全員おぼえておきなさい。そんなバカなこと言ひやつには・・・」

「

これから何万回と聞かされぬことなる言葉をアリアは言ひ放つ。

「風穴開けるわよーー！」

第3話 奴隸宣言

どうしてこうなった？

あの最悪の自己紹介が終わって、現在俺はアサルトにいる。そこでアリアは突然俺に一対一の勝負を申し込んできたのだ。アサルトの教師、蘭豹はやれやれの一言。

「誠、あんたの実力見せてみなさい」

ガバメントを構えるアリア。

ん？俺こいつに名前教えたつけ？

まあいい、久しぶりに本気で戦つてみるか。

「始める！糞ガキども！」

蘭豹の合図とともにアリアが二丁の銃で3発ずつ発砲した。俺は同じくガバメントを取り出しそれを丁寧にはじく。

前にも言ったが俺のガバメントは改造してある。通常は8発までしか入らないが俺のはその倍の16発まで入る。デザートイーグルもあるので装弾数では俺が有利だ。

俺は背中に隠してあつた短めの日本刀を取りだし構える。銃と刀を同時に使う、これが俺の戦闘スタイルだ。

その間にもアリアは俺めがけて2発発砲してくる。直撃は免れそうにない銃弾を俺は日本刀で切り裂く。

この日本刀はかなりの業物でな、銃弾ぐらいなら簡単に切れる。

俺とアリアの銃技を互角とすると、このままでは勝つのは難しい。仕方ない、と俺は目をつぶり精神統一

「あたしをなめるな！」

いつの間にかマガジンを入れ替えてフルオートで発射された16発もの銃弾は俺には届かない。

無駄のない動きで回避した俺はガバメントをしまい、デザートイーグルを取り出す。

一撃で決める！ デザートイーグルで一発発砲、アリアは銃口から飛び出した銃弾の軌道読み、すぐそれが当たらないように回避をする。しかし突如軌道を変えた銃弾にアリアは吹っ飛ばされた。

「そこまでだ！ 糞ガキども！」

蘭豹の声。

俺はアリアの首元に日本刀を突きつけていた。俺の勝ちだ。

だが、アリアは苦悶の表情を浮かべつつ
「ぐつ・・・あんたいつたい・・・」

「なかなか楽しめたぞ、じゃあな

「もう一回勝負しなさいー！」

「また今度な」

俺はアリアに背を向け、アサルトを出て行った。

突然だが俺、杉崎誠は学園都市の人間であった。

レベル5に最も近いとされたレベル4の風使いだ。

俺はアンチスキルに所属していて、そのとき起こったとある事件の犯人を探しだしぶち殺・・・捕まえるために武偵になった。

さつきの曲がる銃弾もこの能力を使用したものだ。

俺は能力を使用するとき目を閉じ集中力を高める。それにより俺はレベル5並の力を使うことができのだ。

これがなければレベル5らしいのだが、武偵高に転校してしまった今もまだこれは克服されていない。この能力使用モードの時の俺は周りの物の動きを風で察知することができる。そのおかげでアリアのフルオート射撃回避できたわけだ。

んーやっぱり疲れるなあ・・・能力使用モード、早く休みたい。

俺は今キンジの家の前にいる。俺は今年強襲科から探偵科に移動することにした。

マスターーズから部屋はキンジのとこを使えといわれたので、引越しの準備を整えてきたのだ。

ピピンポーン　呼び鈴を押す。

この鳴らし方は俺がキンジの家に来たとき毎回している鳴らし方でこのやり方だと、大体キンジは出てきてくれる。

「はい？」

「よう、キンジこれからよろしくな

「ん?どうした誠?」

「マスターズから聞いてないのか？俺今日からリリースはしない
つたんだ、ほらこれ手紙」

その手紙には

『杉崎 誠 お前 Ireneから遠山のトーリーをめぐめやー。』

「蘭豹か・・・まつたく勝手な・・・」

「なにわともあれ、これがひよひじくなキンジ」

「ああ、よひしへ。部屋はあこへるとい」を好きにつかってくれ

「サンキュー」

Ireneはもともと4人部屋だが、キンジが探偵科に移動した時期もあ
つて今は一人で使っているらしい。

俺が部屋に荷物を置いていると・・・

ピンポーン・・・また呼び鈴が鳴る。

キンジは反応しない居留守を使う気だな。

ピンポンピンポン・・・

ピポピボピボピボピボピボピボ

「だれだよ」

どたどた、痺れをきらしたキンジがドアの前に行き、ドアを開け

る。

俺も誰か気になつたので部屋をでて廊下に立つ。

「遅い！ あたしがチャイムを鳴らしたら5秒以内にでる」と…。」

両手を腰に当てて、赤紫色のつる皿をぎざんとつりあげていたのは

「か、神崎！？」

制服姿の神崎・H・アリアだった。

「アリアでいいわよ」

キンジを押しのけて部屋に入つてくるもんだから、俺とアリアの皿が合つた。

「何だ、誠もいたのね。ちようどいいわ

「ふえ？」

間抜けにも変な声だしちまつた。

キンジの制止も聞かずアリアはそのトランク中に入れといつていつう言葉を残し、リビングに入つてしまつた。

俺が外をみると、ブランド物の車輪つきトランクがあつた。

仕方ねえ、運んでやるか。

お、重・・・何は言つてるんだよこれ。

キンジも廊下に文物のトランクがあつてはましいのか運ぶのを手伝ってくれる。

リビングに運ぶとアリアが部屋の様子を見回していた。

「あんたたち、一人暮しなの？」

「ああ、今日からな」

「まあいいわ」

何がいいんだ？

アリアは窓のそばまで行き、体を夕日に染め、アリアは俺たちに振り返りこうついた。

「キンジ、誠。あんた達あたしの奴隸になりなさい。」

「奴隸宣言・・・・・」

第4話 新しい発見

ど、奴隸！？ 意味がわからん。

アイコンタクトでキンジに助けを求めてみるが、固まつてゐる。

「ほりー、ちつとも飲み物ぐらじに出しなやこよー、無礼なやつらねー！」

たつた今俺達に奴隸になれと宣誓してきたアリアはぼつさつとソファーに座つてしまつ。

「ゴーヒー、Hスプレッソ・ルンゴ・ドップオー、砂糖はカンナ！ 一分以内！」

無礼者はどつちだまつたく。

それに何だそのゴーヒーは、Hスプレッソまでしかわからん。俺はアイコンタクトで『とりあえずゴーヒー出してやれよ』とキンジにアイコンタクトを取る。

『了解』とキンジはアリアにインスタンストゴーヒーを出した。

アリアは不思議そうにゴーヒーのにおいをかいだりしながら

「これほんとにゴーヒー？」

「それしかないんだ、ありがたく飲めよ」

「変な味、ギリシャゴーヒーこういつと似てる・・・でもこうひとつと違つ」

何だギリシャコーヒーって。

この子こんな小学生みたいに見えてコーヒー好きなのか？ 人は見かけによらないもんだなあ。

「今朝助けてくれたことは感謝してる。それにその・・・お前を怒らせるようなことを言つてしまつたのは謝る。でもなんでだからってここの押しかけてくる？」

アリアは田だけをキンジにむけ

「わからぬの？」

「わかるかよ」

「誠もわからないの？」

「わかるか！ てか何で俺の名前しつてるんだ？ 名乗つた覚えはないんだが・・・」

「あんた朝体育倉庫にいたでしょ。気になつたから調べてみたのよ」

調べた！？ いやまたあれには気づいてはいないだろう。
あれはマスターZにも隠してもらつてるしな。とくにあいつらが
そんな簡単に情報をもらすわけがない。

「あんた達ならすぐわかると思つてたのに。んー、そのうち思い
当たるでしょ。まあいいわ」

よくねえ！

キンジと俺は同時に叫んだ

「そんなことより、おなかすいた」

いきなり話題を変えやがった

お、そのソフナーの手すりにもたれかかる仕草かわいな。
キンジ大丈夫か？

見るとキンジは少し顔を赤くして目を閉じてこる。

「なんか食べ物ないの？」

「ねーよ」

「ああ、パンならあるぞ賞味期限昨日切れたばかりだからまだ・・・」

「

「風穴あけられたいの？」

「すんませ〜」

俺は素直に謝る。

女の子に賞味期限切れを進めるのは確かにどうつかと思つ。
あれ、昨日の晩飯のように買ってたが結局ゲームに夢中でくわなかつたやつだし。

「じゃあ、コンビニでもいくかキンジ」

よく遊びに來ていたのでわかる。

キンジの家には基本食べ物がないのだ。

「」んびに？ ああ、あの小さなスーパーのことね。

じゃあいき

ましょい

「じゃあってなんだよ」

「馬鹿ね、食べ物買い物に行くのよ、もつ夕食の時間でしょう」

そろそろ太陽が沈んでまつとこいつの時刻、俺は今朝の体育倉庫に来ていた。

キンジをコンビニに誘ったのはよかつたが、用事を思い出しなんか適当に買つてくれと言つてからキンジたちと別れこじきたのである。

「は～、結局、巻き込まれたな俺。いつもはただの不幸だが今日は少しラッキーだったかもな」

さて、と俺はある人物に電話をかける。

「もしもし」

「はいは～い、どうひりさまかにやー？」

「俺だよ誠だよ、報告することができたんだ」

「誠か？ 半年ぶりだにやー、それで報告とは？」

「あれを持つてるやつを見つけた。このレーダーにまばたちらり反応してたしな」

と俺は右手に持った外見は携帯のレーダー見る。

これは学園都市が秘密裏につくつ出したある金属に反応するレーダーだ。

「何ー？ わかった上に報告しつゝ、誠は現状維持でたのむぜい

「了解、じゃあな」

電話を切りポケットに直すと俺は小走りで家に帰ることにした。

第5話 大ピンチ！？

「ただい・・・」

「でてけ！」

「俺がただいまーといい終わる前にアリアの怒鳴り声がある。どうしたんだ？」

「な、なんで俺が出て行かなくちゃならないんだよー。」
「お前の部屋か？」

「分からず屋にはお仕置きよー。外で頭冷やしてきなさいー。しばらく戻つてくるなー。」

フーとアリアは猫のようにキンジに威嚇している。
災難だなキンジ。

「何してんのよ、誠」

「ふえ？」

「あんたも出て行きなさい！ 風穴開けるわよー。」

「俺もかよー。今帰つてきたところなんだぞ。
少し休ませてくれよ。」

こつじて俺とキンジは夜の外へ追いつかれるのだった。

「なり、お前らだけで組んでくれ。俺を巻き込むな

「あつえんだる、あいつ」

「はは、災難だなキンジ。俺は別にチーム組んでも良こと思つたが。
あの子結構面白そうじやねえか

「家に居座るそりだ・・・」

「組む? なんのことだ?」

「誠はどうするんだ? あいつと組むのか?」

「ああそりか、誠はあの時になかったか。どうやらアリ亞は俺達
とチームを組みたいらしい。それと俺達がチームを組むと言つま
で家に居座るそりだ・・・」

「まあやつだな」

「あつえんだる、あいつ」

「そりやあ無理だろ。あの子俺とキンジをチームに加えたいんだ
ろ?」

「くそつ何でこいつなつたんだよ・・・今日は最悪の日だよ・・・」

「俺も今日は厄日だ・・・」

「誠は強襲科だつたんだから何か知つてるんじゃないのか?」

「いや、知つてのとおり俺は普段能力は使つてないし、目立つこと
もしてない。『ぐく普通のAランクとして過ごしている俺が目を向
けてもらえる』ことなんてなかつたんだがなあ」

「前から思つていたがなんで能力使わないんだ? 使えばBランク
は確実だろ」

「切り札は隠すもんだからな。 それに相手がただのAランクと油
断してくれるかもしないだろ」

それに俺の戦闘スタイルは刀と銃を両手に持ち、相手の攻撃を粉碎
しつつこちらの攻撃を確実に当てる事ができなければ意味がない。
攻撃を防いでも相手に当てる事ができなければ意味がない。
だから相手が能力を知らないなら戦いやすい。

なので俺はこの能力のことはキンジにしか話してはいけない。
キンジとは昔よく組んでいたからこの能力のこと教えていたほうが
連携もとりやすかつたからな。

「そろそろ戻るか?」

「ンビーにきて30分ほど、ンビーで立ち読みも限界がある。俺は持っていた雑誌を棚にもどす。キンジは律儀に一冊雑誌を買つてゐるな。

「先行つてゐるぞ」

「あー、ちょっとまてよー。」

俺はポケットから棒状の携帯ワイヤーを取り出しキンジのベランダの柵に絡めると一気に巻き戻す。

んーやつぱりなかなか使えるなこのワイヤー。

移動にはもつてこいだ。装備科の平賀さんには感謝しないとな。

ベランダから中に入るが人の気配がない。

帰つたのか？

そういうやまだ風呂入つてなかつたなキンジが帰つてくる前に風呂でも沸かすか。

風呂場に向かうと……

ちやほん

風呂場から音がした。

扉をソーソーと開けてみると曇りガラスの向こうで電気がついている。

まじかよー！

焦つて辺りを見回してみると洗濯籠に女ものの制服と拳銃、日本刀そしてトランプ柄の……

こ、殺される！　ここにいるとやばい早く逃げないと……

俺が忍び足で風呂場から離れベランダから逃走を図るつとしたとき、

玄関の扉が開いた。

「おこー！ 誠おま・・・」

俺はダッシュでしかし足音は立てないよつこキンジの口をふさぐ。
俺はアイコンタクトで『アリア 風田 危険』とキンジに伝える。
キンジは顔を真っ青にして閉めたドアに手をのばしたとたん。

ピン、ポーン・・・

い、いの慎ましやかなチャイムは

(こ、白雪だー)

第6話 わるべ物

俺はよろけて壁にドンと手をぶつけてしまつ。

「あ、キンちゃんどうしたの？ 大丈夫？」

しまつたー！ だめだもう居留守はつかえねえ。
諦めたようにキンジがドアを開けるとそこには巫女装束の白雪が立
つていた。

うーん、やはり何度見ても美人だな。

「あ、誠君も一緒にたんだ」

「ちよ、ちようび今日からここに住むことになつたんだ」

「そ、そんなことより何だよお前のその格好は

「こら、キンジ！ バスルームを見ながら言つなー。気づかれたらや
ばい。」

「あー・・・これ、私授業で遅くなっちゃつて・・・キンちゃんに
御夕飯作つて届けたかったから、着替えないで来ちゃつたんだけど
・・い、嫌なら着替えてくるよー！」

「いや、別にいいから」

ほんとにキンジ一筋な子だよな。 ついやましこぞキンジ。

白雪は超能力捜査研究科 通称SSRに所属している。

超能力といつてもあそこ学園都市とは少し違う。

学園都市のように人工的に脳の回路を組み替えて能力を記録術するのではなく、自然の靈場で修行し習得するらしい。

らしいというのは俺がそこには入ったことがないからだ。

白雪はその優等生らしさのだが、俺はその能力をしらない。

「ねえ、キンちゃん、今朝の自転車爆破事件の周知メールつてもしかしてキンちゃんのこと?」

「ああ、俺だよ」

「おお、白雪が飛び上がったぞー〇センチほど。」

「だ、大丈夫？ 怪我とかなかつた？ 手当てさせて」

「俺は大丈夫だから、触んな」

「は、はいでもよかつた無事で。それにしても許せないキンちゃんを狙うなんて！ 私絶対犯人を見つけてコンクリ・・・じゃない、逮捕するよー！」

「こ、こえええ。この子だけはぜつたに敵に回しちゃダメだ。東京湾に沈められる。確実に。」

「し、白雪！ 大丈夫だつてこんなことこのでは田常茶飯事だろ？」
「この話はこれで終了」

「は、はい、えっと・・・はい」

まったく、キンジの前だとすぐ言つこと聞くいい子だよなあ。
アリアにもじうじうところは見習つてほしいもんだ。

素直なアリアか・・・だめだ想像できません。

「でも、キンちゃんたち少し変だよ」

「へ、変? どの辺が?」

「キンジい! 焦るな! 冷静になれ!」

「なんかいつもより冷たい気が・・・」

「俺達いまゲームで勝負してた。今良いところなんだよ、それで早くゲームに戻りたくて」

「ゲーム?」

白雪は首をかしげていたが納得してくれたようだ。

「じゃあ、これ

白雪がもじもじと手に持つっていた包みを渡してくれる。

「筈(じ)飯作ったの、今旬だし、それに私明日から今度は恐山に合宿でキンちゃんの(じ)飯作ってあげられないから・・・」

キンジの顔が一瞬、ほんの一瞬だけ明るくなつたような気がした。キンジ贅沢だぞこんなにいい子なのに。

「ああ、ありがと、よし用事は済んだ、さあ帰(か)へ、な?な?」

「一日に(一食も作つちゃ)うなんて、な、なんか私お嫁さんみたい

だね・・・つて何言つてんだろ私。 あは、あはは変だね。 うん。
キンちゃんどひつ思つへ。」

「わ、分かつたからお手を取つてだせこ、白雪さん」

「や、キンジ敬語やめひー。 ばれるつてー。」

「分かつたつて・・・それつてつまり私キンちゃんのお嫁・・・」

ぼちやん

や、やべええ アリアが出てくる!-?.

「中に誰かいゐの?」

「中には誰もいませんよー」

だから敬語やめひー。 ばれる、マジでー。

「キンちゃん、誠くん? 私に何か隠してゐ」とない?」

「「ないない」」

一人ではもる。 やばい、ばれたか・・・?

「やひ、よかつた」

白雪が背を向けて帰つていぐ。 ふう、白雪でよかつたぜ。

よしー

扉が閉ると同時に俺とキンジはガツツポーズをとる。

危なかつた、後はアリアだ。

おそらく俺達を追い出したのは風呂に入りたかったからだろう。すなわち、今俺達がここにいることは死を意味する。

武器を没収しておこひ。

後々考えればこのときさつさと逃げてればよかつたのだが切羽詰つてる俺達にそんなことを考へてゐる余裕はなかつた。

風呂場に駆け込み、制服が入つた洗濯籠に手を突つ込んだ瞬間、曇りガラスの扉が開いた。

俺とキンジとアリアは目を合わせ、時が一瞬止まる。
ああ、いいにおいだなあ、場違いなことを考へる俺とおそらくキンジ。

ツインテールをほどいてロングヘアになつてた全身つむべたのアリアは

「へ、変態」

ぱっと右手で胸を左手でそ、その・・・おへその下を隠した。

そして、俺達の手が洗濯籠に突つ込まれてるのを見て鳥肌を立て
いる。

やばい！ 早く弁解しないと！

「ち、ちが・・・」

俺とキンジは弁解しようつと同時に手を上げるがそれがいけなかつた。キンジの手にした日本刀の鞘にはパンツ、俺の手にしたホルスターには、ブラがそれぞれ引っかかっていた。

小さなトランプ柄のマークがプリントされた子供っぽい・・・

「し、死ねえ！」

キンジが壁に蹴り飛ばされたのを見て、俺は転げ落ちるよ／＼に飛び出した。

「逃がすか！」「のド変態！」

素っ裸のまま飛び出してきたアリアは、俺が窓から飛び降りるよりも早く後ろから俺を蹴り飛ばし、俺そのまま意識を失った。

「……ンジほらさつさと起きる！」

目が覚めた俺が聞いたアリアの第一声はそれだった。

部屋からは朝一のはんを催促するアリアの声と抗議するキンジの声が聞こえてくる。

俺はDEとガバメントをホルスターにしまい、背中に日本刀、別名

『Absolute Cut』を背負う。

これは学園都市が極秘に発明した、どんな物でも切り裂く軽量かつ高い硬度を持つ日本刀だ。

この日本刀の刃にはある金属が使用してあり、切ることのできる対象は人や銃弾だけではない。

超能力だろうが自然現象だろうが切ることができる。

もちろん切れるものはその持ち主の力量によるのだが。

装備を整え朝食であるカロリーメイトをかじっていると

「つまご」とつて逃げるつもりね！」

廊下にてきたキンジにアリアは噛み付いてしまつ。時計を見るともう7時55分だ。

「キンジやばい、58分のバスにおくれる！」

「なに！？ 離せアリア！ あれに乗れないと確実に遅刻なんだ！」

「やだ逃がすもんか！ キンジ達は私の奴隸だ！」

俺も奴隸ですか・・・って今はそんなことはどうでもいい。

「キンジ走るぞ！」

俺達が出発間際に乗ったバスは難なく学校に到着。

5時間目は専門強科の授業になる。もちろんクエストで校外に行くやつも少なくはないが。

俺はキンジに『アリア 情報 集める キンジも頼む』とだけアイコンタクトで伝えその場を後にした。

「報酬によるだぬ

頼む」

「依頼だ依頼。 神崎・H・アリア こいつの情報を集めるだけ

「おう、誠今日はどうしただぬ？」

「よし、剣斗ひさしぶり

普段はネットゲームなどばかりして遊んでいるのでランクはA
しかし彼は本来この学校でトップの実力を持っている。
依頼両はネトゲのリアアイテム、これを出すと大抵しつかり仕事を
してくれる。

いまどき珍しいきのこ頭で目が狐のように鋭く語尾に『だぬ』がつ
く少し変わったやつだ。

俺は今情報科にいる。
アリアの情報にしろ、自分で調べるには限界がある。
そこで俺は情報収集を依頼しに来たのだ。
今回仕事を頼むのは俺と同じく学園都市からきた（俺が学園都市
出身だとはしらない）
抓田剣斗だ。

とせつげなく、せじいものリストと書いてある紙を見せるよひが引
き出しがから取り出す。

「えじや『聖剣虎』でどうだ？」

「おっけーだね。今口中に調べとへから午後ことひこめてだね」

その日の午後資料をもらつた俺は、ある人物に電話をかけていた。

「 - - - を手に入れるのは難しそうだ。 あれは俺達でどうにかで
きるものじゃない」

「だが、 - - - は絶対に死守しなくちゃならぬいぜい。 魔術サイ
ドにそれが渡るとやばいからこやー」

「了解、 また何かあつたら連絡する」

第7話 キンジ、シスコン疑惑

「よひ、 キンジ」

俺は女子寮の温泉から出でてきたキンジに声をかける。

「ま、誠！？」

キンジは手に持っていた袋をさりとがくす。

「何だよそれ？」

「な、なんでもない。 ただの袋だ」

怪しげにゼキンジ、俺はキンジが隠したそれをすばやく奪い取る。
さて中身はなにかな。

よ、よせとこ!キンジの制止を聞かずあけてみるとセリフが…
「ま、妹ゴス2、3…。 キンジまさかお前にこんな趣味があ
つたとは…」

普段ヒステリアモードーなることを恐れ女子と距離を置いてこむキ
ンジからは考えられない。

そつかキンジは妹好きなのか。

「ち、ち、違つて… 誤解だ！」

「まあそつ焦るな、みんなには黙つててやるから。 キンジがシス
コンってことね？」

「それが誤解だ！ それは理子に頼んでいたアリアの情報収集の報酬の残りだ！ 2や3は嫌いだつて受け取ってくれなかつたんだよ！」

「なんだ」

確かに理子は2や3などの続編を嫌う傾向にある。
なぜだかは知らんが。

キンジの手をふと見ると腕時計がない。

「キンジ腕時計どうした？」

「せつを理子に情報をもらつたときに壊れて、理子が『クライアントの持ち物をこわしたら理子の信用にかかる』とかで持つて帰つてこちまつたんだよ」

んーなんだろ。

なんかよくないことが起きるきがある。
気のせいだと良いんだがな。

あの後キンジと別れた俺は寮には帰らずにとある人物と待ち合わせをしていたファミレスにきていた。

「何のようだ？ お前が俺をよびだすなんて」

「なあーにたいしたことはない。 ちよいと新しい発明品をもつてきただけだにゃー」

と金髪でグラサンをかけ、緑のアロハシャツをきている男が机の上に時計と・・・なんだこれ？

「ここの黒いでこぼこの箱はなんだよ」

「ここの時計は前に渡したレーダーの新作だ新しい機能もつけたある。 それどころちは特殊弾だぜい」

「特殊弾？」

「そつちにもある武偵弾と同じ能力つきの銃弾だ。 能力とかわこれの中に書いてある」

「ん？ これどうやってあけるんだ？ か、硬てえ。

これ本当に人の力で開くのか？

俺ががんばっている金髪でグラサンをかけた男はそれ時計つけない

とひらがないんだにゃーとけらけり笑つてこる。

先に言えよ！

やつと開いた箱の中を見ると・・・それがまな色の弾丸がきれ
いに並べられて入つていた。
弾の大ささからしてロボのような。

「まだ試作品だが、戦闘では結構やくだつとおもつかせこ」

「ああ、サンキュー」

「それといれからの」とだが、誠お前はあいつの護衛に当たつてく
れ

「やっぱあれの持ち主つて」とか

「おひらへんな

「了解だ。 それと第一位もよひつて」といってくれ

と言ふて残し俺はファミレスを出で、学生寮に向かつて歩き出した。

第8話 墓ちたキンジ

「アサルトに戻つてあたしから逃げたときの実力をもつ一度見せてみなさい！」

「あれは・・・あの時は偶然うまくいっただけだ。 所詮俺はEランク武僧なんだよ」

「嘘よ、あんた入学試験の成績Sランクだった」

家に帰るなり何なんだこれは？

リビングからはキンジとアリアの怒鳴り声が聞こえてくる。
入学試験か・・・俺もキンジと戦つたんだが能力使う前にまけたんだよなー。

キンジのヒステリアモードのこともそこで知ったんだつけ。
その時、俺とキンジは受験生をはじめ隠れていた教官も全て倒したため俺達は入学当時のSランクだった。

それ以来は本気を出していなかつたのでAランクに下がつたんだけどな。

アサルトのSランクは特殊部隊一個中隊に匹敵するものだから当然といえば当然だが・・・

「つまり、あれは偶然じゃなかつたってことよ！ あたしの直感に狂いはないわ！」

「ど、とにかくだ・・・あ、誠！」

キンジが俺に気づいたみたいだ。

「エリ行ってたのよ誠一。」

「ちゅうと昔の友達に会つてな、ファミレス行ってたんだよ」

「前の高校のやつか?」

話題を変えるチャンスとみたか、キンジが話に乗つてくるな。

「まあ、がくえ・・・」

「キンジー、話はまだおわつてないわよー。」

駄目だ、話題は変えれそうにないぞキンジ。

「と、とにかく今は無理だ!」

「今は? ってことは何か条件でもあるの? 行つてみなさいよ協力してあげるから」

うーむ、アリアはその協力つてのが分からぬからいえるんだよな。キンジをヒステリアモードにするには性的に興奮させる必要があるからな。

たとえば、下着を見せるとか胸をわらせるとかキスをするとか・・・

・この子が進んでできるひととは思えん」とばかりだ。

ほひ、キンジも手伝わせてるとこ想像したのか顔が赤くなつてやがる。

「教えなさいその方法! 奴隸にあげる賄い代わりに手当つてあげるわ」

「アリアがキンジにせまる。」

「やばいな、ヒステリアになつたら……」

「いやまて、むしろあの時のキンジのほうがすんなり言ひないと聞いてくれるかもしねや。」

「あの状態のキンジは女の子の言ひとせめつたに断らないからな。」

「キンジ、お前の負けだよ」

「キンジは裏切り者といつて見てくるが妥協したらしく」

「一回だけだぞ」

「一回だけ?」

「やつぱり、無条件降伏はしねえか。」

「戻つてやるよアサルト」、ただし組んでやるのは一回だけだ。
戻つてから最初に起きた事件をお前と一緒に解決してやる。それ
が条件だ」

「……」

「だから転科じゃなくて自由履修としてアサルトの授業をとる。」

「それでもいいだろ?」

「キンジお前の考えは大体わかる。」

「アリアと組もうと考えている俺とは違い、お前は組みたくないからヒステリアモードでなく通常モードでアリアを失望させる気だな? 通常モードだとマジでEランクだからお前。」

「いいわ、この部屋から出て行ってあげる」

アリアもついて妥協したな

「あたしにも時間がないしその一件であんたの実を見極めることにする。もちろん、誠も自由履修とりなさいよ。そこでもう一度見極めさせてもらひつわ。前のままでもあんたは十分合格点だけど」

仕方ねえか・・・これも任務のうちだしな。

「どんな小さな事件でも一件だぞ」

「OKよ その代わりどんな大きな事件でも一件よ

「分かった」

「ただし手抜きしたら風穴あけるわよ。もちろん誠も!」

「ああ、約束する全力でやつてやるよ」

「了解、」

キンジと俺が並んでアリアは満足そうに部屋をでていった。

それにもkinjiと組むの久しぶりだな。

どうか大きな事件が起こってくれますように俺は神さまご祈るの

だった。

どうせするなら派手に行きたいだろ?

第9話 明日無き強襲科

アサルトは100人に97人しか卒業できないといわれている。

通称『明日無き学科』

まあ、必ずしもそうではない。

100人全員が卒業できた年もあるらしい。
訓練中に命を落としたり 依頼中に命を落としたりなどその理由は
さまざま。

もちろん三人以上の時もある。

お、キンジがきたな。

俺は先に蘭豹に話を通してあつたので、すでに自由履修の手続きな
どは済んでいる。

はは、さすがキンジ人気者だな。 困まれてやがる。

ここまで声が聞こえてくるだ

「おーう!キンジ! お前は絶対帰つてくると信じてたぞ! さあ、
ここで一秒でも早く死んでくれ!」

「まだ死んでなかつたのか夏海! お前にそ俺よりコソマ一秒でも
早く死ね!」

「キンジ! やつと死にに帰つてきたか! お前みたいな間抜けはすぐ死ねるぞ! 武偵つてのは間抜けから死んでいくものだからな

「じゃあ何でお前が生き残つてんだよ、村上」

『死ね』つてのはアサルトでは日常会話のおはよづ、いんじわると

同義なのだ。

もみくちゃになりながらもみんな楽しそうだ。
いつもパーティを組んで活動するアサルトではみんな自然と人懐っこくなる。

アサルトは死ぬ確立はあるのだが楽しいんだよな。

「ハハハ、やつぱり面白によなアサルトは」

「全然おもしろくない。だから戻りたくないんだ」

夕方、アサルトを出た後俺はキンジに笑いながら話しかけていた。
キンジは肩を落としてるな。

諦めな、お前はアサルトに戻る運命だったのさ。

「お、アリアだ」

「何？」

キンジが顔を上げると校門のところにいたアリアがこちらに来る。
キンジと俺はアリアを挟むように歩き始める。

「あんた人気者なんだね、ちょっとびっくりした」

「こんなやつらに好かれたくない」

「おい！ それって俺も入ってるのか？」

「当たり前だ」

くそ、はつきり言いやがった。俺もうアサルトじゃないんだぞ！

アリアはそんな俺達を見ながら

「あんたって人好き合い悪いし、ちょっとネクラッつて感じもするけどわ・・・」このみんなはあんたや誠には一目をいくる感じがするんだよね」

それはやつぱりあの入試試験を見てるからだろつた。

俺はキンジにこそ能力を出す前に負けたが、その前はバリバリ能力使って戦つてたからな。

その俺をキンジは一瞬で倒したんだ。みんながキンジの一目を書いているのも当たり前と言っちゃ当たり前か。

アリアはちよつと視線を地面に下ろしながらキンジを見る。

「あのセキンジ」

「なんだよ」

「ありがとね」

「何をこまかう・・・」

声は小さかったものの心底うれしそうにするアリア。
むう、なぜかキンジにむかつく。

「勘違いするなよ。俺は仕方なくここに戻つてきてるだけだ。
事件を一件解決したらすぐ探偵科に戻る」

「分かってる、でもセ」

「なんだよ」

「アサルトの中を歩いてるキンジなんかかっこよかつたよ」

キンジ、顔があかいぞ

「あたしなんかアサルトでは誰もよってこない・・・実力差がありすぎて誰も近寄ってこないのよ。

まああたしは『アリア』だからそれでもいいんだけど」

確かに記憶をたどればアリアは転校してきてから一人でいたな。かわいいといふわざを聞いて俺も見たことはあったが、あいつは浮いていた。

「『アリア』って、オペラの『独奏曲』って意味もあるんだよ。一人で歌うパートなの。一人ぼっち　あたしはどこかの武道館でもやつ。ロンドンでもローマでもそつだつた」

「それで俺達を奴隸にして『デュエット』にでもなるつもりか?」

俺が聞いて見るとアリアはくすくすと笑った。

「あんたも面白い」といえるじゃない

「そうか?」

「うん」

「んー・・・アリアの笑いのっぽはわからん。

「キンジはアサルトに戻ったほうが生き生きしてる。昨日までのあ

んたは自分に嘘ついてるみたいで苦しそうだった。 今のほうが魅
力的よ」

「そんなこと……ない

ははは、キンジ今度お前の部屋に地雷仕掛けやるー。
死ね

軽いアサルトの挨拶をキンジにするとキンジは

「俺と誠はゲーセンに寄つてぐ。 お前は一人で帰れ！ てかそもそも今日から女子寮だろ。 一緒に帰る意味がない」

あ、そういうばそうだつたな。

今日こそバイ ハザードをクリアしてやるぜ。
このシユーティングゲームは日本一の難易度を誇る。
理由は説明するまでもないだろ？

「バス停までは一緒ですよーだ」

俺達をアサルトに戻せたのがうれしいのか、アリア嬉しそうだな。

「ねえ、『ゲーセン』つてなに？」

「ゲームセンターの略だ。 そんなことも知らないのか？」

「帰国子女だからしようがないじゃない。 じゃあ、あたしも行く。
今日は特別に一緒に遊んであげるわ。 『じ褒美よ』

「じりねえよ、そんなの『じ褒美』じゃなくて罰ゲームだら

キンジ、やっぱ女の子とは付き合い悪いな。

それだけヒステリアにはなりたくないってことか、などと考えていると目の前からキンジとアリアの姿が消えていた。
どこいった？ 辺りを見回してみると前方にキンジとアリアが・・・
つて俺置いて行かれてる！

最初は早歩きだった一人だが次第に早くなつていきついには全速力
に。

「お前らゲーセン行くだけで競争してんじゃねえ！」

まったく、こいつらの体力はどうなつてんだ・・・
俺はぜいぜい言いながら遅れてゲーセンに入つていくのだった。

第10話 ゲーセンの戦い

俺がゲーセンに入ると最初に田に飛び込んできたのはガラスケースにへばりついたアリアだった。

なんか小学生みたいに見えるぞ。

俺は笑いをこらえながらキンジたちの方に向かっていくと

「おひ、誠遅かつたな」

「お前らが早すぎんだよ。 それよりもビーツしたんだアリア

「かわいー・・・

アリアは口を逆三角形にしてよだれを垂らしかけていた。
これはだめだろ、公開できる顔じゃない。

「やつてみるか?」

キンジが言つとアリアの顔がぱあつと輝く。

「できるの? すぐできる?」

「できる、やり方を教えてやひつか?」

コクコク頷くアリア。

今日はやけに素直だなアリア。 ちょっと調子が狂うぞ。

俺はその場を離れ札を小銭に替える。

今月はいろいろもらつちまつたからな(装備や食品など)

自分で買わなくていい分金にも少し余裕がある、少しなので使いま

くる」とはできなが。

俺が戻ると

「今度こそ本氣の本氣！ 本氣本氣本氣ほ
い！」

ハハ、どうやら全然取れなによつだな。
見かねたキンジが何か言おうとしたとき

「ここはココロキヤツチャーの神と謳われた俺にまかせりー。」

ずいつと前にでてアリアを押しのける。

プライドの高いアリアは当然の反発するが強引に押しのけた。

俺の実力みせてやるぜ！

10分後

「なぜだ、なぜなんだ・・・」

俺は地面にひれ伏していた。

「全然駄目じゃないの誠」

アリアの呆れたような声
くわ、こんなはずでは・・・

「もう一回だ！」

「やめとひつて、破産するぞ誠。 今度はおれがやるよ

うつ・・・そう俺は絶対に取るともう3万円ほど使っているのだ。

俺はアリア同様反抗はしたがキンジに押しのけられてしまつ。

ハハハ、キンジも3万円ほど使って敗北を味わうがいい。

だがその願いはまったく叶わずキンジの操るクレーンは人形を吊り上げた。

落ちろ！落ちろ！落ちてくれー！念を送るが人形はどんどん持ち上がりつていく。

「見てキンジ！ 一匹もつれてる」

ば、馬鹿な・・・

「キンジ放したらただじゃおかないわよ

「もう、俺こはだうひりできねえよ」

「あ、入る！ 行け行け！」

こうなつたらやけだ！ いけええええ！

クレーンが開き一匹、一匹と落ちて行き近くにあつたもう一匹も引きずり込まれるように落ちていった。

「やつた！」

「やしちー！」

「やしちー！」

無意識に本当に無意識にパチイと俺達はハイタッチしていた。

「　「　「　あ　」　」

田と田が合い俺達は田をそむける。
それにしてもキンジやるな。これからこのFOOキヤツチャーの
神はキンジに決定だな。

「ま、まあ馬鹿キンジにしては上出来ね

アリアは取り出し口から人形を三匹わしづかみにして取り出す。
タグにはレオポンと書いてあつた。

聞かないキャラだな。

「かあーわあいいー！」

ぎゅうううとアリアはレオポンを思いつき抱きしめる。
レオポン！ 逃げる！ 破裂するぞ！ と内心思いつつ
この子もやっぱり年相応の女の子なんだなとおもつた。
何かがこの子の本音を曲げている。
直感だがなぜかそんな風に思えた。

やはり『あれ』に関係があるんだろうか。

もしかしたらそれに『あいつ』がかかわってるかも知れない。

俺の家族を、親戚を、全てを奪つた『あいつ』は俺が武僧になるこ
とを決め必ずぶち殺・・・逮捕すると誓つたそいつとつながつてゐ
かもしれないしな・・・

「キンジ、誠！」

はっと顔を上げるとアリアは俺とキンジにさつきの人形を押し付けてきた。

「ちゅうど3つあるし、三人で分けましょう。キンジの手柄だけ
ど誠もがんばってたから」こ褒美よ」

釣り用氣味の細めをこり細めたアリアに俺はドキッとしてしま
つた、不覚にも。
ちくしょお、かわいいじやねえか。

「ちゅうと悔しいけどな」

俺とキンジはレオポンを受け取り、それが携帯のストラップである
ことに気づいた。

キンジが付けはじめ、それに続いて俺、アリアもつけ始めた。

俺ら三人そろって携帯のストラップなしだったのかよ。

「先につけたほうが勝ちよ」

何！？ アリアめ俺の負けを増やすきか！ くそっ！ 絶対勝つ！
やけくそ氣味に紐を押し込むとするが入らない。この紐太いな。
誰だよこんなつけにくいの案が得たやつは。

結果は、アリア、キンジ、俺の順番だった。

結局負けかよお・・・

まあみんなほぼ同時だったんだがな。

その後も俺達はゲームを遊び廻して帰るこひで俺の財
布の中身は百円玉が3枚・・・
俺泣いてもいいですか？

第1-1話 事件発生

午前4時半、俺は欠伸をしながらベットから起き上がる。
ささつとジャージに着替え刀を背負い家を出る。

軽くランニングしてからアサルト訓練場の裏にある公園に行く。

よし、人はいないな。

俺は普段人前では超能力を使わないので腕が鈍らないためにここでよく訓練している。

俺は風使いだがもうひとつ不思議な能力がある。

こいつはキンジにも教えてないのだが俺は火を出せるのだ。
学園都市では能力は一人一つというのが当たり前だ。

この能力は俺が物心ついたときから持っていた。

まあレベル2並の火力しか出ないんだけどな。

これと風の能力を合わせると面白いことができる。

俺は目をつぶつて精神統一

目標は地面に転がっている空き缶だ。

「むん！」

刹那、赤い光とともに空き缶が爆発

うんうん、調子いいな今日は。

その後刀の素振りをして俺は家に帰った。

シャワーを浴びてからソファーでじっくりしてるとキンジが起きてきた。

「おはよつ誠、また特訓か？」

「ああ、キンジも朝練したうどつだ？ 結構たのしいだ」

「俺はいい、遠慮しないべ」

キンジと向氣ない話をじてこむことの間にか時刻は7時54分
そろそろ出るか・・・

びつじてひつた・・・

7時58分のバスはよく混む。 しかも今は雨が降っている。
バスはすでに満員状態だ。

「やつた！ 乗れた やつたやつた！ よつ、キンジ、誠おはよつ

くそお、武藤のやつバンザイしてやがる。

「O、乗せてくれ武藤！ 時間が・・・」

俺とキンジは必死に頼むが

「やつしたいといひだが無理だ！ 満員！ お前、自転車でこよ」

駄目だ！ 俺達の自転車はこの前粉々になつちまつたんだよー。

「無理なもんは無理だ！ 男は思い切りが大事だぜ。 2時間目に
また会おつー！」

2時間目に会おつ、じゃねーだろ！

薄情者の武藤の言葉を最後にバスは扉を閉めてしまった。

もうだめだ、遅刻確定だ・・・

大雨の中、俺とキンジは歩く。
いつそのことゲーセンでも行くかなどと俺が思つていてキンジの
携帯が鳴つた。

「もしもし」

キンジがポケットから出たレオポンを引っ張り出し電話に出る。

『キンジ今どこ? 誠もいる?』

アリアか? 時刻はもう8時20分、一時間目が始まってる時間だ。

それなのに電話とは何かあったか?

「アサルトの近くだ。誠もいるぞ」

「丁度いいわ。すぐそこでの装備にて武装して女子寮の屋上に来な
さいー!」

「何だよアサルトの授業は五時間目からだろ?」

「事件よ事件! あたしが来ると言つたらすぐに来るー!」

「おーおい、まじかよ

〇装備つてのはいわゆる強襲用の装備だ。

事件か・・・

アリアの言い方からしてそんな小さな事件じゃあ無いだろ？
俺はキンジと屋上に出ると階段の廊の下には狙撃科のレキがいた。
アリア、レキと知り合ったのか。

「よひ。 レキお前もアリアに呼ばれたのか？」

「・・・」

レキやん！ 無視しないで！

レキの肩をぽんぽんと叩くとレキはヘッドホンを外してじらりを見上げて来た。

「久しづりだなレキ、お前もアリアに呼ばれたんだろう？」

「はー」

抑揚のないレキの声

「こつも何の音楽聞いてるんだ？ お前

「音楽ではありません」

「じゃあなんなんだ？」

キンジも興味があるのか聞いてくる

「風の音です」

分からん・・・

レキはドラグノフ狙撃銃を肩にかけなおした。

「時間切れね」

通信を終えたアリアが俺達の方に振り返る。

「もう一人ぐらいSランクがほしかったとこだけどほかの事件で出払ってるみたい」

アリアの中では俺とキンジはSランクなんだな・・・
それにしても何の事件なんだろう。
Sランク扱いするやつを4人も集めるなんて大きな事件なんだろう
な・・・

第12話 バスジャック

「バスジャックだと！」

俺はいまヘリの中にはいる。

装備の確認をしつつ俺達はアリアに状況を説明してもらっていた。

「武偵高の通学バスよあんた達の寮の前に7時58分に止まつたやつ」

ハハハ、俺達を置いていった天罰だな武藤め！

「犯人は車内にいるのか？」

かなりまずい状況だと理解したのかキンジが尋ねる。

「分からぬけどたぶんいないでしょ。バスには爆弾が仕掛けられてる。たぶん自転車に爆弾を仕掛けた犯人と同一犯でしょうね」

「丁度いい。俺もあの犯人は捕まえてやりたいと思つてたんだ。それにしてもどうやってこの情報を掴んだんだ？ 東京武偵局は動いてるのか？」

「奴は毎回減速すると爆発する爆弾を仕掛けて自由を奪い、遠隔操作でコントロールするの。でも、その操作に使う電波にはパターンがあつて今回もその電波をキャッチしたのよ。東京武偵局は動いてるわでも相手は動き回るバスよ？ 準備が必要だわ」

「でも、武偵殺しは逮捕されたはずだぞ？」

「それは真犯人じゃないわ」

「びつじてそう断言できるんだアリア？」

「こりじて事件は起こっているがまだ模倣犯の可能性もある。」

「とにかく！ 事件はもう発生してる！ ミッシェロンは車内の全員の救助！ 以上！」

「リーダーをやりたきややれ！ リーダーならそれらしくみんなに説明し・・・」

「武偵憲章一条『仲間を信じ仲間を助けよ』－ 被害者は武偵高の仲間よ！ それ以上の説明は必要ないわ」

アリアはキンジの言葉を遮り言い切つてしまつ。

ハハ、諦めろキンジ。

この子はもうとまらなさそうだぜ？

「とにかく、全員救出すつやあいにんだり？ キンジよかつたじやねえか大事件だぜ」

「キンジこれが約束の最初の事件になるのね

キンジはがっくり肩を落としながら

「大事件だな、俺はことんついてないよ」

「約束は守りなさい。 あんた達が実力を見せてくれるの楽しみに

してゐるんだから」

俺は大丈夫なんだが・・・この状況じゃキンジはなあ・・・
俺はキンジに『いいのか』とアイコンタクトで尋ねると『いいんだ
よこれで』と無言で返してきた。

「見えました」

レキの声に俺達は防弾窓の下を見る。

立場の町が見えるがバスなんてどこにも見えない。

「レキ、どこだ?」

「ホテル日光前を右折してるバスです。 窓に武僧高の生徒達が見えます」

「よ、よく分かるわねあんた。 視力いくつよ

「左右ともに6、0です」

「すげえ・・・と俺が関心していると
アリアが作戦を説明する。

「パラシユートでバスの上に降りるわ。 あたしはバスの周囲を警
戒、キンジは車内で状況を確認、報告して。 誠とレキはヘリで待
機」

なるほど遠距離でも援護できる俺とレキは万が一の見張りつてこと
か。

キンジとアリアは強襲用のパラシユートを使いバスの上に降りた。

キンジが失敗して落ち物になつたところをアリアが助ける。

『ちよつと・・・ちゃんと本氣でやつなさこー。』

『本氣だつて・・・これでも今は

無線は常時つないのでそこからキンジヒアリアの声が聞こえてくる。

『キンジ、誠じりへ、ちゃんと状況を報告しなやー』

『お前の言つたとおりだつたよ、遠隔操作されてる』

「ユーハちは今のところは問題なさそうだ、そつちまじうなんだ?」

『バスの下にプラスチック爆弾があるわ、炸薬の容積は3500立方センチはあるわ』

やべえなそりや 電車でも吹つ飛ぶ量じゃねえか。
バスがビルに隠れてへりからみえなくなつたとき

「やばい、アリア後方からー!」

「え?」

キンジの警告とアリアの戸惑いの声が通信機から聞こえてくる。

やつとバスが見えたときには一台のオープンカーがバスから距離をとつてゐるところだつた。

追突したのか? よく見ると人が乗るべき場所に俺を襲つてきたあのサブマシンガンがある。

やばい

「キンジ伏せろー。」

無線から聞こえたのかバスの乗客がみんな伏せた。 その瞬間にサブマシンガンが車内にぶち込まれる。

「ちつ」

すぐさま目をつぶり精神統一するがこの雨で風が吹き荒れてるなか
じや風を読みきれない。

しかたねえ、と俺が指をパチンとならすとバスの後ろのオープンカーの銃と前のタイヤが弾け飛んだ。

車はスピinnをはじめガードレールに激突 ドンという爆発音とともに炎上した。

「キンジ、アリア大丈夫か?」

『ヘルメットが割られたけど大丈夫よ』

『二つちは運転手が被弾した、今武藤に運転代わつてもらつてる』

だがバスはもうレインボーブリッジに入つていい。 こんなのが都心で爆発したら大惨事だぞ!

キンジがバスの屋根に上つてくる。
何やってんだあいつ

「キンジ今すぐ車内に戻れ! ヘルメットも無いのに危険だ!」

キンジはアリアのワイヤーを引き上げているところだった。

その後ろから猛スピードでルノーが突っ込んで来る。
やばい、間に合わねえ

「後ろだ！」

俺が叫ぶがキンジはなにはなにやら分かつてなさそつだ。

『伏せなさいよ！ 何やつてんの馬鹿！』

アリアがキンジにタックルした。

アリアはそのまま動かない。

『アリア アリアああつ』

キンジの叫び声がここまで聞こえてくる。
くわ、ドンドドドン ルノーは破壊したが間に合わなかつた。

「レキ！ 爆弾を頼む！」

「私は一発の銃弾」

レキの狙撃するときのお決まりの台詞だ。

「銃弾は人の心を持たない。 故に、何も考えない」

「ただ目標に向かつて飛ぶだけ」

銃声が3発

何かの部品がバスの下から落ちて後ろの道路に散らばつていいく。

「私は一発の銃弾」

続いて一発

ギン、部品から火花が上がり宙を飛びさらには中央分離帶も越えて海に落ちていった。

遠隔操作されていたのか、海に落ちた爆弾は巨大な水しぶきをあげた。

さすがだな、レキ

俺はすぐさま救急車を呼ぶ。
無事でいてくれよアリア・・・

第1-3話 新たなる任務

アリアはあの時キンジをかばって額に銃弾を受けたらしい。らしいというのは俺自身が本人に話を聞いてないからだ。何でもその額に受けた傷はどうやっても痕が残るみたいなのだ。女の子にはキツイ傷だと思うなんせ一生残るのだからな。見舞いぐらいはちゃんと行つてやると俺は思つていた。しかしそれは叶わなかつた。

そして俺は今学園都市に戻つてきている
といふか無理やり連れて行かれた。

あの野郎なにが『はいはい誠くんお仕事ですにゃー』だ!
俺はアリアが病院に連れ見舞いに行く途中に強引に連れ戻されたのだ。

ちょっととまじつちの都合も考えろよな。

「機嫌直せよ、一回べらりで終わる任務だからこそのやつ?

「何で疑問系なんだよー」とひうで任務つてなんだよー?

「学園都市に侵入した敵の殲滅だ。なあに誠なら簡単だろ?」

ほんとに簡単に言つてくれる。

俺を呼び戻すぐらいだ、そんなに簡単に倒せる敵じゃないだろ?」

俺達はファミレスに入るとそこのはすでにメンバーはそろつっていた。
メンバーといつても一人なのだが

「ンだよやつときやがつた。おせほんだよー下がアー!」

いすに腰掛け「コーヒーをすすっている全身真っ白で赤い目をした
こいつは一方通行。^{アキセラレータ} 学園都市第一位の能力者でベクトル操る能
力を持つ。

「相変わらずだなお前は、打ち止めちゃんは元気か？」

「うるせエ、お前には関係ねエだろオガ」

「はいはい、そこまで！ そろそろ行くぜい」

入つて間もないファミレスから出た俺達は近くの空き地に止められ
ていたヘリコプターに乗り込む。

中はなかなかの広さで10人は軽く乗れそうだ。

壁にはM4やM60などの銃が大量に立てかけてある。

「こんなに大量の銃いるのか？」

俺が聞くと、金髪にグラサンのアロハシャツを着た男
春はるは銃の一つを手に取りながら答える。

「言つてなかつたか？ 今回の敵は約3000人だ」

「はあ！？」

さらつと告げた土御門に俺は啞然とする。

3000人つておま、物理的に3人じゃ無理だろ。どこの軍隊だよ

「一方通行は都市内を、俺はここからサポートする 誠は都市外周
の奴らを頼む 作戦開始は5分後だそれまでに準備を頼む」

俺は手榴弾を10個ほどポケットに入れM60をもつて待機する。もちろん背中には刀、ホルスターにはガバメントとロードが入っている。

「準備できたら 土御門」

「早いな誠、ちょっとまって」

土御門はボタンを操作し扉を開ける。そこから外をのぞいて見る。どうやらもう都市の外周まで来ているみたいだ。

「少し早いがお前早く戻りたいんだろ?」

「ん? そつだが・・・」

「なら・・・行つて来い!」

ドン、と俺は外にたたき出された。
俺の体が急降下を始める。

「終わつたら帰つていいからこやー」

上から聞こえる土御門の声

「覚えてやがれえええええ!」

俺は叫びながら地面に向かつて落ちていくのだった。

第14話 現れた仇

やばい、早く能力使用モードにならねえと
どんどん地面に近づいているなか俺は目を閉じ精神統一を始める
ふわッ、と急に落下速度が落ち音も無く地面に到達する。
俺は木の生い茂る広い森に落とされた。

「まつたくあの野郎 死んだらどうするんだ！」

まったく、もうちょっとと場所考えておとせよな
俺が愚痴っていると周囲から敵の気配が。
500つてどこか・・・俺は風の能力を応用し周囲に探知結界のよ
うなものを張ることができる。
この中にいる奴は少しでも動けば俺にその情報が伝わる。 最大範
囲は2キロちょっとだが、
現在周囲にいる約500の敵は300メートルほど距離を序所に
詰めてここに向かっている。
来るなら来い、ぶつ瀆す！

「（）」いつらに銃なんか使ってても拉致があかねえ・・・使うか？

敵との交戦が始まった。

飛んでくる銃弾をかわし、あるいは超能力を使って軌道を捻じ曲げてそらす。

「（）」（）いつらに銃なんか使ってても拉致があかねえ・・・使うか？

俺はM60を地面に捨て刀を抜く。

「炎陽」
「えんよう」

パチン、俺が指を鳴らした刹那 前方の敵がまとめて焼き飛ぶ。これは風の能力で集めた大量の酸素を俺の火で引火、爆発させる技だ。

普段人に対して威力を加減するのは難しいが・・・今回の任務は敵の殲滅。

加減の必要はない。

パチパチパチパチ、連発する。 飛んでくる銃弾は刀で切り落としただ連発。

辺りはもう火の海だ。

すでに初め500人だった敵ももう残りは数人。 楽勝だな

そのまま倒して行き敵は残り一人となつた。

「あんたで最後だ、おとなしく殺られてくれや」

パチン、俺が指を鳴らすと同時に敵は炎に包み込まれる。 ごう、辺りに風が吹き荒れ炎を吹き飛ばす。

「なつ！？」

風を纏い中から出てきた男が握っているのは一本の刀
真っ黒な刀禍々しいそれはどこか懐かしい。

俺はその刀を知っている・・・？

「その程度か？ 杉崎誠、そんなんじゃ死ぬなお前もその仲間も」

「お、お前は一体何者だ！」

「分からんのか？ これを観ろ！」

突風が吹き荒れ、男は紫の炎を纏う。

あの炎は・・・

忘れもしない俺が5歳の「ひい父さんと母さんを焼き尽くしたあの炎
だ。」

「まだ分からんのか、お前の父と母を殺したのはおれだ」

男のその言葉によりそれは確定する。

ここにが父さんと母さんを・・・

「ああああああああああああああああああああああ

俺は怒りに我を忘れ切りかかる しかしそれは軽く交わされぬ。
空気の抵抗をなくした限りなく音速に近いそれを男はいとも簡単に
よけ続ける。

ホルスターからDEを取り出し弾が無くなるまで連射。
至近距離で撃つたにもかかわらず男は銃弾を全て切り落とす。

男と俺の刀がぶつかる、そのまま鎧迫り合いなる。
ギン、押し負けた俺は男が放った炎をまともに受けれる。
そこで俺の意識は途切れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1022y/>

緋弾のアリア ~黒き疾風~

2011年11月29日17時56分発行